

「印西地域の石造物～本埜地区の調査から～」

印西市本埜地区（旧「本埜村」）は、旧本郷村と旧埜原（やわら）村が大正2年（1913）に合併し、その後平成22年（2010）3月に印旛村とともに、印西市に編入合併された地域で、中世から続く台地上の旧本郷村は龍腹寺など7か村、近世以後の新田開発による印旛沼畔の旧埜原村は17の新田で構成される二つの歴史を持つ。

この本埜地区には、神社25社、天台宗の7か寺と真言宗・曹洞宗1か寺ずつ、庵跡（現在は地区集会所など）、城砦跡や墓地などがあり、旧村の景観とともに、中世から現代まで多くの石仏や石碑、特に寛文期からの近世の庚申塔や月待塔や近代での記念碑などが多数残され、その数は1331基に及ぶ。

この度、2003年からの印西市教育委員会による調査が終わり、『印西市石造物調査報告書 本埜地区の石造物』が2022年12月に刊行された。今回は、この地区で特に注目された石仏石碑、北総地域の石造物の様相、さらに白井市内の石仏を紹介する。

1. 庚申塔

庚申塔とは、60日に1回廻ってくる庚申の夜に、庚申講を行った記念の供養塔である。庚申待の本尊は青面（しょうめん）金剛像で、干支の申（さる）から、「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿像が加えられる。庚申待では三年で十八回行うことを「一座」といい、初期はこの「三年一座」の記念に建立されたという。

近世からの村落共同体建立の石塔を代表する石造物として、最も普遍的で数も多く、本埜地区でも、281基を数える。うち、笠神の155基は、幕末と近代に建てられた2群の「百庚申」（後述）で、単独の庚申塔数は126基である。

(1) 庚申塔の登場

中根の山林内で見つかった寛文2年（1662）銘の三猿像付き板碑型塔は、本埜地区で最古の年銘を持つ。銘文は「奉供養庚申待三年一座成就所／南无青面金剛」と当時の庚申待信仰の趣旨と主尊「青面金剛」の銘が明白に記され、浮彫りされた三猿像も寛文期初頭の優れた像容を残す。印西市では市内最古とされている寛文元年（1661）銘の竹袋（旧印西町）観音堂の庚申塔に次ぐ。

近世庚申塔が定着していく寛文期初頭までの像容は、三猿や諸仏の彫像、文字のみの供養塔などさまざまな形態をとり、主尊も定まっていない。竹袋観音堂の台座に三猿が刻まれた聖観音立像もその一例であるが、千葉県内では野田市関宿台町に寛文3年銘の青面金剛像塔が、印西市内では、寛文11年（1671）銘の小林（旧印西町）の猿田彦神社の四臂の青面金剛像庚申塔が成立し、やがて青面金剛を主尊とする典型的な庚申塔になっていく。一方、三猿が主尊の庚申塔の建立も続けられる。

本埜地区2番目の庚申塔は、押付ヤシロ（水神社）の延宝3年（1675）の三猿塔、3番目は、貞享3年（1686）の物木庚申塚の青面金剛像塔である。物木では、ムラの入り口の庚申塚に江戸前期から幕末までの8基の庚申塔が並び、今でも壮観な姿を見せている。

なお、新田開発により成立した旧埜原村地区でも庚申塔の造立は早く、押付のほか、貞享四年（1687）には、中田切に青面金剛像塔が、酒直ト杭に三猿塔が建てられるなど、前期の本埜地区の庚申塔14基のうち10基を数える。

《参考：白井市内の初期庚申塔》

- ① 木・所沢鷲神社下庚申塚 板碑型 寛文10年（1670）三猿
- ② 谷田庚申塚 笠付角柱型 寛文10年（1670）三猿
- ③ 復・富ヶ谷 香取神社 笠付角柱型 寛文13年（1673）三猿
- ④ 清戸 庚申塚 笠付角柱型 延宝2年（1674）三猿
- ⑤ 復・富ヶ谷 薬師堂 笠付角柱型 延宝3年（1675）三猿
- ⑥ 白井 庚申塚 笠付角柱型 延宝6年（1678）三猿
- ⑦ 今井 稻荷神社 光背型 延宝8年（1680）青面金剛像・三猿
- ⑧ 復・上長殿 庚申塚 庚申塔 笠付角柱 天和2年（1682）三猿

(2) 地域的な特徴を示す中期の庚申塔

その後、下総地域では、青面金剛像塔が数的に最盛期になる江戸中期の享保から宝暦年間にかけて、その像容に画一的な特徴がみられるようになる。

享保3年（1718）銘の下曾根市杵島神社の像容にみられるように、主尊の目がいわゆるアーモンド形で、六臂のうち右手に鈴状または人身の頭部らしき袋状のものを持ち、宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力がない邪鬼がうずくまる姿の特徴は、印西市から白井市や船橋市の東部、我孫子市・柏市・栄町に広がっている。

また三猿の意匠も、両端横向きで中央が正面向きの形がよく類似し、配置される台座や塔身下部のスペースにより、一列の平型、または三角型に配置する特徴がある。

享保 3 年 (1718) 銘の物木の庚申塚の三猿塔はこの三角型の初出である。また同庚申塚に宝暦 4 年 (1754) に造立された庚申塔、中根の笠神古墳群中の寛延 2 年 (1749) の庚申塔などは、この特徴を持つ青面金剛像の下に三角型に配置した三猿が刻まれた典型例である。

本埜地区でこの特徴を持つ庚申塔は、享保 3 年から宝暦 6 年 (1718~1756) の 22 基中に 17 基あり、うち三猿のみは 5 基である。

《白井市の事例》

白井市でも 24 基確認されている。うち谷田庚申塚では、①享保 4 年 (1726) 駒型三猿平型 ②享保 20 年 (1736) 笠付角柱型 三猿△型 ③寛延 3 年 (1750) 駒型三猿平型の 3 基、清戸庚申塚では、④元文 2 年 (1737) 駒型 三猿平型 ⑤宝暦 2 年 (1752) 駒型 三猿△型のみ、河原子阿弥陀堂では⑥寛延元年 (1748) がこの型式である。

(3) 笠神社と蘇羽鷹神社の百庚申

庚申塔は、江戸中期には青面金剛像塔が定番化し、後期前半は「青面金剛」銘、文政期頃からは「庚申塔」銘の文字塔が主流となり、数多く建てられるが、北総で特異なのは、江戸後期から近代にかけて建立された「百庚申」である。

印西市内では、旧印西町の武西・浦部・小林と、旧印旛村の松虫に多石百庚申が、本埜地区では笠神社に幕末の百庚申、蘇羽鷹神社に近代の百庚申がある。

笠神社の百庚申：慶應元年~3 年 (1865~7) 銘、青面金剛像塔 17 基、「庚申塔」銘の文字塔 78 基のほか、破損した廃石塔が 5 基あり、合わせて 100 基となる。

蘇羽鷹神社の百庚申：明治 16 年 (1883) 8 基・明治 33 年 (1900) 19 基・昭和 10 年 (1935) の 33 基の計 60 基。駒型の「庚申塔」銘の文字塔 54 基と、青面金剛像塔 6 基。60 という数は干支の一周の数でもあり、また狭い境内に合わせた数であったと推測される

《白井市の百庚申》

法目の八幡神社に文化 13 年 (1816) の「一石百庚申」塔がある。

(4) 道標を兼ねた庚申塔

江戸後期以降の文字庚申塔には、道しるべが刻まれているものが 15 基みられる。

中根の本埜第一小裏門入口には文化 10 年 (1813) の「青面金剛王／北笠神あじき／東よし田 成田江／西舟尾江戸江／たき村みち江」銘、滝の稲荷神社には文政 9 年 (1826) 庚申塔には「庚申塔／南 たき さくら そうふけ ふなお 道／北 ひらおかこはやしものおきかさかみ道」銘がある。

万延元年 (1860) の竜腹寺路傍三差路の庚申塔の左右側面には「右ハ／よしたか川岸よりなりた／せとかしよりさくら／道」「左ハ／かさかみ／小ぼやし新田／道」と記され、往時の交通の状況を物語っている。

庚申塔が道標を兼ねた理由として、庚申塔の立地がムラの入り口の道路沿いや分岐に多いことと、庚申信仰に加えて、公共の利益のための行いがさらに功德を増すと思われたからであろう。

《白井の道標付き庚申塔の事例》

木・所沢鷲神社下庚申塚 享和 3 年 (1803) 道標付き文字庚申塔 (右面：松戸道 正面：青面金剛 左面：行とく道) など

2. 月待塔と女人講の石塔

十五夜、十九夜、二十夜、二十三夜など特定の月齢の夜に、講の仲間が集まり、月の出を待ってこれを拝む月待行事を行った講中でその供養の記念として造立した石塔を、月待塔という。関東各地には、特に十九夜塔と二十三夜塔が多くみられる。

十九夜塔を建立した十九夜講は、女人成仏を祈って如意輪観音を拝む女人講であったが、次第に安産・子育て・子授かりの祈願が主となり、江戸中期からは、徐々に子安像を刻む子安塔を建てるようになり、近代にはすべて子安塔に替わっていく。

本埜地区では、十九夜塔が 71 基、二十三夜塔が 26 基、子安塔が 38 基あり、そのほか、二十三夜講の供養仏の勢至菩薩塔が 3 基、十九夜塔と推測される如意輪観音塔が 5 基、十五夜塔など稀少な月待塔が 8 基、その他の女人講供養塔が 7 基、銘不明 1 基あり、総計 159 基が月待講か女人講に関連する石塔である。

(1) 二十三夜塔

本埜地区の最古の月待塔は、物木の諏訪神社念仏堂跡の寛文 8 年 (1668) 銘の二

十三夜塔で、優れた像容の勢至菩薩立像を刻む。

中根の釈迦堂跡墓地には寛文 10 年 (1670) 銘の勢至菩薩像塔は、「奉修造勢至菩薩一尊為二世也／結衆三十一人中根村」の銘があり、二十三夜塔と推定される。

江戸後期からは、「二十三夜」と大きく銘文を刻む駒型や角柱型の文字塔が主流となる。中田切三区コミュニティセンターの天保 10 年 (1839) 銘二十三夜塔には流麗な文字上部に來迎する勢至菩薩像が浮彫りされている。

二十三夜講は、二十三夜の月の出も遅く、一般に男性の講、特に「若者中」主体である地域が多いが、本埜地区では江戸後期以降、女人講主体の二十三夜講が多い傾向がある。特に荒野の南之内二十三夜塔群には、女人講主体の二十三夜塔 8 基と二十六夜塔 1 基があり、そのうち江戸期の 4 基には道標銘がある。

《白井市の二十三夜塔》

中木戸諏訪神社の二十三夜塔 (元禄 11 年 1698) が最古で、大正期まで 28 基ある。

(2) 十九夜塔

関東北東部では、旧暦十九日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、如意輪観音の坐像や掛け軸の前で経文、真言や和讃を唱える「十九夜講」が盛んに行われていたという。この十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「十九夜塔」であり、如意輪観音像が主尊として彫刻される。

印西市域では寛文 5 年 (1665) の小倉青年館の十九夜塔が、本埜地区では、寛文 9 (1669) 年の中根の福聚院の六臂如意輪像塔が初出である。同じく寛文 9 年銘の笠神青年館 (原堂) 墓地の六臂如意輪観音像塔も、「十九夜」の銘はないが、「印西之庄笠神之郷同道四十三人」とあり、十九夜塔と推定される。両塔とも、主尊の顔立ちも女性的で美しく優れた像容である。

寛文期から正徳期までの江戸前期の十九夜塔は推定も入れて 22 基、特に延宝期の塔は 9 基を数えるなど、本埜地区は、北総でも早い時期から造立が盛んな傾向があるが、その理由として、十九夜塔発祥の利根川中流域にあり、また龍湖寺や瀧水寺など女人信仰の篤い寺や女人講が盛んな地区が多いことがあげられる。

如意輪観音像の像容は、寛文・延宝期の早い時期は丁寧な像容の六臂像が 5 点と多く、次第に定型的な二臂像のみになっていくが、正徳 2 年 (1712) 銘の安食ト杭の十九夜塔などは天衣の領巾 (ひれ) を後ろに華やかになびかせる。

そして、宝暦 5 年 (1755) 行徳稻荷神社の「十九夜念仏講」造立の十九夜塔の主尊は、思惟相が如意輪観音の赤子を抱く子安像となり、以後、子安像塔へと次第に置き換わっていく。

《白井市の十九夜塔》

平塚の延命寺の十九夜塔 (寛文 10 年 1670) が最古で明治期まで 83 基、十九夜塔と推定される如意輪観音像塔が 16 基ある。

(3) 子安塔

江戸中期までの十九夜塔に替わって、北総の女人信仰の石塔は江戸時代後期から徐々に、そして近代以降現代まで、そのほとんどが「子安観音」や「子安明神」の主尊を子安像として浮き彫りした子安塔となる。

酒々井町などの初期の子安像塔は、主尊が正面を向き肩と胸元に二人の小児を配する特徴を持つが、印西市域や栄町にも多く、中でも瀧の瀧水寺の安永 5 年 (1776) 「子安観世音」銘の子安塔は、今も美しい姿で祀られている。同様な像容は下曾根の市杵島神社の十九夜塔にもみられるが、十九夜塔で子安像を主尊とするのは、この市杵島神社塔と行徳稻荷神社の宝暦五年塔、「十九夜」の文字に子安像を小さく浮き彫りした瀧水寺の文政 10 年 (1827) の角柱型塔の 3 基で、その後は「女人講中」銘の子安塔が多くなる。

子安像塔の数は、「十九夜塔」銘の 3 基も合わせると、江戸中期が 4 基、江戸後期が 11 基、近代が 18 基、現代が 4 基、不明 2 基である。なお、現代の最新は、安食ト杭の昭和 62 年 (1987) 銘の子安像塔である。

そのほか、本埜小林水神社の文久元年 (1861) 「子安観世音」銘の文字塔が 1 基、竜腹寺日枝神社の安永 5 年 (1776) 銘の子安石祠がある。

《白井市の子安塔》

子安像塔は中木戸観音堂 (文化 6 年 1809) が最古で平成期まで 54 基、子安石祠は平塚鳥見神社 (寛政 12 年 1800) など 3 基ある。

(4) 十五夜・十七夜・二十夜 (日)・二十六夜塔などの月待塔

その他の月待塔として、十五夜塔と十七夜塔それぞれ 1 基ずつ、二十夜塔と二十

六夜塔が3基ずつ、その他2基がある。

十五夜塔は、物木諏訪神社念仏堂跡の天明8年(1788)「奉需十五夜當村講中」銘の文字塔である。

十七夜塔は、行徳の稻荷神社大日堂の元文5年(1740)「奉供養十七夜講中廿二人」銘の観音菩薩立像塔で、この観音像は来迎の際の阿弥陀像の脇侍のように、両手で蓮台を捧げ持つ像である。

二十夜塔は、物木諏訪神社念仏堂跡の寛文9年(1669)「二十日夜念仏供養」銘の十一面観音立像塔と、同所の明和元年(1764)「廿日構供養塔」銘の如意輪観音像塔などの3基である。寛文9年銘の十一面観音像は、左手に蓮をさした水瓶を、右手には修験者が持つ短い柄の「手持ち錫杖」を持つ。錫杖を持つ十一面観音は「長谷寺式」と呼ばれ、桜井市長谷寺の勧進聖によって、長谷観音の靈験譚が拡大、その勧進聖の姿が反映されたものという説がある。

二十六夜塔は、荒野の南之内二十三夜塔群の中に安永8年(1769)「奉待廿六夜講中／南ハいん〔 〕／西ハ(き)おろ(し)／女人講中」銘の道標付き文字塔、中根の釈迦堂跡墓地の安永9年(1780)「奉建立廿六夜待供養」銘の地蔵菩薩像塔など3基がある。月齢二十六前後の月は三日月のように細く、東天に姿をみせるのは明け方に近い時間である。この月光の中に、弥陀・観音・勢至の三尊が見えるといつて、江戸では文化・文政期に月待信仰の名を借りた夜遊びがはやり、また本尊の愛染明王の名から染物業者に信仰されたという事例があるが、印西市内ではその様な傾向はみられず、二十三夜講と併行また不分離な念仏講であったと推測される。

3. 仏像供養塔

(1) 大日如来像塔

大日如来には、智拳印を結び、悟りを得るための智慧を象徴する金剛界と、定印を結び無限の慈悲を象徴する胎蔵界があり、二つ揃って密教の世界観が構成されている。

本埜地区の大日如来像塔は5基で、うち念仏塔が4基である。

中根の戸崎観音堂の大日如来像塔は、明和5年(1769)「奉建立齊念佛供養善男女／同行七十九人／」銘で、「念佛頭 願主」として中根村2名の名があり、像は引き締まった軀体に凜とした表情で、智拳印を結ぶ。「時念仏」とも書かれる「齊念佛」の「齊(とき)」とは、法会の際の僧侶の食事をさし、仏と飲食を共にすることに特別の意味をもつ念仏講が行われていたと推察される。

押付の薬師堂は安永8年(1779)「念仏供養押付講中十五人」銘。ともに金剛界の定印を結び静かな瞑目する坐像の念仏塔である。

《白井市の大日如来像塔》

榎台入口大日塚の大日如来像塔(寛文12年1672)、平塚延命寺(明和元年1764・天明3年1783)、復・上長殿熊野神社(安永5年1776)など9基ある。

(2) 地蔵菩薩像塔

① 単独の地蔵像塔

本埜地区の地蔵像塔では、中根東漸寺の延宝7年(1679)銘の光背型塔が初出であるが、銘文が読めず、その目的は不明で墓塔の可能性もある。

笠神の南陽院には享保12年(1727)銘の丸彫りの延命地蔵坐像塔、同じく笠神の向公会堂には享保18年(1727)銘の丸彫りの地蔵立像塔がある。

両塔とも「日本回國」の銘がある廻国塔で、廻国塔とは日本全国六十六部を廻国巡礼した記念の供養塔である。南陽院の塔は、三故人と「三界万靈有縁無縁」の供養塔を兼ね、像容も良く貴重である。

中根の戸崎の宝暦8年(1758)銘の光背塔は台石に21名の女性名があり、女人講の造立と推測される。

物木の龍湖寺の明和4年(1767)年銘の丸彫りは、14人の戒名の被供養者と7名の供養者、龍湖寺住職の名があり、「諸願成就」の願文が彫られている。

将監の密蔵院の三界萬靈塔は、宝珠をもって飛雲に乗り来迎する姿の地蔵菩薩像が角柱塔上部に浮彫されている。明和5年(1768)年「三界萬靈奉／建立地蔵菩薩／想若者中」(「想」は「惣」か)の銘がある。「三界万靈」とは、欲界・色界・無色界に存在するすべての靈を意味し、その安楽を祈願する。

② 六地蔵塔

六体揃う物木龍湖寺参道の正徳2年(1712)銘の六地蔵塔と、明和3年(1766)と寛政3年(1791)銘がある角田栄福寺の六地蔵塔は貴重である。

中の八幡神社の六面石幢は嘉永3年(1850)銘があり、笠部を失っているがにこやかな優れた像容を残す。

荒野コミュニティセンターの大正12年(1923)銘の笠付角柱型塔は三面に各2体を浮彫した優れた塔である。

また龍腹寺仁王門前の宝永 4 年 (1707) 銘石灯籠 1 対の右側灯籠竿部には六地藏像が、左側には六観音像が陽刻されている。

③ 花見堂地藏塔

花見堂地藏とは、合掌型地藏像の光背に「花見堂」などの銘、造立日が宝永～文化年間で三月三日や三月吉日が多く、「童男童女」「子供中」などの子供に関わる銘がある小型の地藏塔である。

印旛沼北西部に 26 基と関連が検討中の 10 基、それに先行するさいたま市内など 10 基が報告されている。おそらく旧暦の 3 月子供主体に地藏様を祀り飲食した行事であったろうと推定されるがその実態は不明である。

本埜地区では和泉屋氷川神社の享保 18 年 (1733) 「童男童女華見堂」銘の地藏像塔のほか、中根 903-2 丁字路路傍に「花見堂地藏尊」の銘の地藏像塔 2 基がある。中央の無銘の延命地藏立像の両脇 2 基の花見堂地藏は、右が総高 82 cm で合掌する地藏像の浮彫り、銘は「花見堂地藏尊／寛延二己巳三月三日／同行十人」。左は総高 88 cm、宝珠と錫杖を持つ地藏像の浮彫りで、銘は「奉供養花見堂地藏尊／(梵字カ)／宝暦十庚辰天三月三日」である。

《白井市の花見堂地藏塔》

谷田西福寺上路傍の花見堂地藏塔 (享保 2 年 1717) など 8 基ある。

(3) 馬頭観音塔

憤怒相の馬頭観音は変化六観音のひとつ、民間信仰ではその「馬頭」という名から馬の守護仏、さらにすべての畜生類を救うとされて、その石仏の多くは路傍やソウマンド (馬・動物の墓) に供えられる。

本埜地区では、安永 7 年からの刻像塔が 8 基、文政 10 年以降の「馬頭観世音」銘の文字塔が 18 基、計 26 基がある。

滝 390 地先の塚には、享和 3 年 (1803) 銘の刻像塔を中心に計 7 基の馬頭観音塔が並んでムラ境の馬頭塚を形成し、同塚上の安永 7 年 (1778) 銘の刻像塔は、本埜地区最古の馬頭観音塔である。

本埜小林基地の天明 3 年 (1783) 銘塔は小林新田のムラによる造立であるが、龍腹寺の道六神前の辻の文化 3 年 (1806) 銘塔に「世主文左右門」と記されるように、馬頭観音塔は次第に飼っていた馬を供養する個人による造立がほとんどとなる。

《白井市の馬頭観音塔》

富塚鳥見神社 (宝暦 2 年 1752)、平塚延命寺 (天明 3 年 1783)、清戸庚申塚 (寛政 7 年 1795) など計 91 基と多い。

(4) 聖徳太子像塔

物木の龍湖寺本堂左前に珍しい聖徳太子像塔がある。両手で柄香炉を捧げ持つ「孝養太子像」で年銘はなく、台座に「房陽平郡／山崎松林英徳／造之」の銘がある。

4. 富士講関連の石造物

本埜地区の富士講関連石造物の最古は、滝の白山神社の延享 2 年 (1745) 「富士浅間宮／講中」銘の石祠で、龍腹寺浅間神社の明治 12 年 (1879) 「仙元神社」銘石祠まで、各地域の寺社境内に 8 基の富士信仰の石祠が建てられている。

笠神の浅間神社に明治 14 年 (1881) 富士講中による石祠が奉納されてからは、笠神浅間神社を拠点として、富士講が組織的に展開されていく詳細が石造物でわかる。明治 19 年 (1886) の「磐長姫命」銘の神塔が「月並講」により建立、明治 20 年 (1887) 銘碑から昭和 23 年 (1948) 年銘碑までの 6 基の大型の富士講碑、「食行身祿尊師」銘塔、「御室仙元大士」銘塔の計 9 基があり、特に、明治 20 年銘碑は北須賀村の先達「小川北行」の「登山三十三度大願成就」を、明治 37 年 (1904) 銘碑は笠神區の先達「長行真山」の「三十五度大願成就」を記念し、印西市域内外におよぶ「山包講」の地域的な連携とその活動の盛況を伝えている。

また、和泉屋新田でも氷川神社の大正 10 年 (1921) 「大願成就／木行平月／おこたらず誠の道を辿りつゝ神のみしるしとはにあおがん」銘の石祠など、近代の富士講関連の興味深い石造物がみられ、以上、本埜地区の富士講石造物は、富士講碑は 14 基、石祠 9 基、神塔 2 基の計 24 基を数える。

《白井市の浅間神社・富士講碑》

名内浅間山の浅間大菩薩石祠 (文政 11 年 1828)、木・所沢鷲神社のコノハナサクヤヒメ神像碑と小御嶽碑 (年銘なし) など 8 基がある。

5. 印西大師新四国霊場巡礼に関わる石造物

本埜地区に特徴的に多いのは、弘法大師石像、弘法大師供養塔 (「南無大師遍照金

剛供養塔) など、印西大師八十八か所新四国巡礼に関連する石造物である。

印西大師新四国霊場は、**昭和 10 年 (1935) に建てられた笠神の南陽院の勧請記念碑**によれば、南陽院の臨唱法印が享保 6 年 (1721) に四国霊場から勧請して創設、その後天保元年 (1830 碑文では「文政 13 年」) 南陽院の孝祐法印が再興し、88 札所に弘法大師石像を配したという。その範囲は、印西市全域と一部白井市域におよび、札所は 88 か所のほか番外 70 か所ほどあり、おおよそ 160 か所を巡行している。

創設当時は、弘法大師の霊力にあずかり、水害や飢饉の苦しみから逃れ、同時に、死者の供養、自身の健康長寿を祈念した巡礼で、利根川下流域では、最も古い四国霊場写しであった。

印西大師の特徴は、先達寺の南陽院(笠神)、来福寺(平賀)、廣福寺(師戸)の 3 か寺が交代で出発と結願寺を受け持つことで、現在は、毎年 4 月 1～6 日に行われている。

本埜地区の札所の数は重複も入れると、28 か所で、そのうち 15 か所が番外である。各札所には複数の弘法大師石像が、また巡礼の拠点となった地域には、「小廻組合」の「南無大師遍照金剛供養塔」、また 3 基の霊場標石が 2 か所に建立されている。

なお、将監の密蔵院と安食ト杭青年館(覚了庵)の札所は、河内郡・北相馬郡・下埜生郡・印旛郡の旧下総国四郡にまたがる「四郡大師」(別称:布川組八十八ヶ所)の札所でもある。

(1) 弘法大師坐像塔

弘法大師は、真言宗開祖の空海の 921 年追贈名で、金剛名号は「遍照金剛」である。本埜地区の弘法大師像は、「印西大師新四国霊場」の巡礼札所の小堂内に祀られている小型坐像の 15 か所の札所の 40 体である。

年銘が残る最古は、印西大師再興の文政 13 年 (1830) 銘、行徳稻荷神社の銘石像、続いて下曾根市杵島神社の嘉永五年銘石像で、江戸期の印西大師の再興の記録として重要である。他に年銘が有るのは、**明治 19 年 (1886) 佐野屋墓地の弘法大師像**と、昭和～平成期 4 体。他の石像 33 体は無銘である。

(2) 弘法大師供養塔(「南無大師遍照金剛供養塔」)

本埜地区には、「南無大師遍照金剛」の銘の角柱型塔が 18 基あり、うち 15 基が先達の笠神南陽院・小林西福寺・萩原竜泉寺三か寺銘のある印西大師の供養塔である。

行徳稻荷神社の明治 13 年銘塔は、笠付き角柱塔の上部の石龕内に丸彫りの小さな

弘法大師石像を置き、先祖の霊を供養する。安食ト杭青年館の明治 28 年 (1895) 塔も角柱塔の上部に弘法大師像を小さく浮き彫りしているが、この明治 28 年銘塔から**荒野コミュニティセンターの大正十一年 (1922) 銘塔**まで 5 基には印西大師先達三か寺の銘、そして押付薬師堂の昭和 4 年 (1929) 銘塔から滝瀧水寺の昭和 39 年 (1964) 銘塔までの 8 基には、先達 3 か寺に加え「小廻組合」の銘があり、昭和期に印西大師巡礼のため「小廻組合」が組織化されたと推測できる。

なお、大正 11 年銘塔には、9 地区 220 人の氏名があり、近代における印西大師の盛況を伝えている。

(3) 新四国八十八か所写の霊場標石

新四国八十八か所霊場の札所であることを示す霊場標石が 3 基あり、各札所が勧請元の四国八十八ヶ所霊場の何番札所の写しであることを示している。

最古は**天保 2 年 (1831) 酒直ト杭水神社の標石**で、「土佐國定山奥院寫」の銘がある。「定山奥院」の「定山」は佐田山(=蹉跎山)、そして「奥院」は佐田山の白皇権現で、四国 38 番札所「蹉跎山金剛福寺」の奥の院であったが、明治初年の神仏判然令で佐田山神社となり、現在は白山神社になっている。

酒直ト杭水神社には、**明治 5 年 (1872) の「第六十五番／豫洲三角寺写」の銘のある標石**がある。

また中田切三区コミュニティセンターには、**同明治 5 年銘の「第三十三番／土州高福寺写」銘の標石**がある。この高福寺とは土佐の 33 番札所「雪蹊寺」のことで、鎌倉時代以前の古称である。廃仏毀釈で廃寺となり、明治 12 年に雪蹊寺が再興されるまでの間、31 番竹林寺で「高福寺」の名で納経されていたという。

これらは、明治初頭、神仏分離令直後の混乱期の四国札所の実態を知る重要な石造物である。

《白井の霊場標石》

名内東光院、平塚延命寺、富塚西輪寺、向台薬師堂 本郷浅間塚、今井青年館、下長殿青年館、根・七次長楽寺、富ヶ沢光明寺 (2 基) の 9 か所に、印西大師・下総四郡・吉橋大師の札所を示す文化 5 年 (1808) から大正 10 年 (1921) までの霊場標石 10 基がある。

5. 水の神を祀る石造物

稲作に恵みの雨をもたらし、洪水を防ぎ、水をつかさどる神は、ムラの暮らしの生命線であり、また印旛沼・下利根川流域の舟乗りや漁獵の民にとっても重要な神であった。本埜地区には、安食ト杭・押付ヤシロ・本埜小林・酒直ト杭・松木に水神社があり、いずれも埜原の新田地区で、特に印旛沼の洪水との闘いの歴史をもつムラの「氏神」である。また田畑の水源と湖沼の新田開発に伴う治水を守る女神として、「弁財天」の石塔石祠が水神社と共に多く祀られている。

(1) 水神社

水神を祀る石造物は、石祠 5 基、神塔 1 基があり、最古は安永 3 年 (1774) 銘の和泉屋氷川神社の石祠 (No.1320) である。

安政 3 年 (1856) 年銘安食ト杭の水神社の本殿となる石祠は、高い基壇の上に築かれ、「氏子中／天下泰平五穀成就」の銘、「願主」は埜原の安食ト杭など 7 新田と松虫新田におよぶ。

本埜小林の水神社の本殿の文久 4 (1862) 銘石祠も、台石に「氏子中」と小林新田のほか 4 新田の名主・組頭の名が並ぶ。

萩埜飛地の鳥見神社には、明治 24 年 (1891) の石碑には「水神宮／萩原新田／講中」銘のある神塔が建立されている。

明治 36 年 (1903) 再建の甚兵衛の水神社石祠は、「氏子中／埜原新田堤防組合拾九村」の銘があり、近代における治水史と埜原新田の結束、水神信仰の強さを物語っている。

(2) 弁財天

弁財 (才) 天は、サラスヴァティー即ち川の名の女神で、印旛沼・下利根川流域では航海の安全のほか、田畑の水源と湖沼の新田開発に伴う治水を守る女神として、水神社と共に多く祀られている。

本埜地区では、弁才天の石祠が 2 基、神塔が 4 基ある。最古は笠神弁天堂の宝永 5 年 (1708) 「奉造立辨財天宮一字」銘石祠で、笠神村の施主 12 名の氏名がある。立地は谷津の開けた裾の水田内で、池の中の小島跡である。

滝の山林内の弁才天石祠は元治元年 (1864) 再建で、瀧村 32 名と龍腹寺村 1 名の氏名が連記されている。立地は、谷津頭の水源地で、ため池のほりである。

6. その他の神々

(1) 道祖神

道祖神は、岐(ふな)の神・塞(さえ)の神といわれ、ムラ内への悪霊侵入を防ぐと同時に、道路と道行く旅人を守り、また子授け・安産の御利益のある最もポピュラーな神である。

本埜地区の調査では、道祖神石祠は 13 基、大小道祖神群 1 群を記録した。

年銘の古い道祖神石祠は、寛保 2 年 (1742) 銘、滝 315 付近路傍の石祠で、現在も二股大根などが奉納されている。

中田切白山神社の大正 6 年 (1917) 銘と萩埜鳥見神社の大正 11 年 (1922) 銘は、女性名の連記もあり、女人講が関わると推測される。

また、道祖神石祠の周りに小型の一石石祠を多数並べ置く事例があった。前出の中田切大正六年銘石祠のほか、松木新田墓地の道祖神群には道祖神の石祠大小 48 基と残欠 7 個が集積されてある。

(2) 神像のある石祠

①天神石祠

菅原道真を祀る天満宮の石祠には、天保 2 年 (1831) の龍腹寺地藏堂境内の石祠、佐野屋八幡宮の石祠のように神像が浮彫りされた事例がある。

②熊野三神の石祠

家津美御子・速玉・牟須美の熊野三神を浮き彫りした文化 7 年 (1810) 銘の石祠が個人の屋敷神として祀られている。

8. 近代の記念碑・顕彰碑

記念碑は個人または特定の集団が行った事績を後世に残すために、その内容を石碑に刻み付けたものでその内容は、地域に貢献した人の顕彰碑、義民碑、社寺の改修や催事、開拓や耕地事業を記念するもののほか、軍人の顕彰・慰霊やその他学校沿革など公共事業に関するものなど多岐にわたる。

明治から昭和期の建立が多く、明治初期の平石の自然石製から、大正・昭和期の石巻産のスレート石製の 2m を越す大型の石碑へと変化していく。

近代の碑の表面には、社会的地位がある人や文化人が揮毫した「題額」に難解な漢文体の碑文・詩、撰文者・書者・刻者 (刻文は地元安食ト杭の梶谷石材店の有能な技のよるものが多い) 氏名などを、裏面には多数の寄附者の名を丁寧に刻んだ荘重な

ものが多く見受けられる。

近代の個人顕彰の記念碑は、近世からの筆子塚からの継承に始まり、次第に地域行政の貢献者の頌徳碑、そして文化人から軍人への顕彰対象が推移していく。

安食ト杭水神社には、江戸時代から印旛沼の開拓とその治水に心血を注いできた下井新田の吉植家の幕末から明治時代の2代の顕彰碑がある。

(1) 平松基女の筆子塚

龍腹寺墓地の**明治 16 年 (1883) 銘の自然石の石碑**は、平松基(もと)女の筆子塚である。

基は、蝦夷地を探検し後に幕臣となった最上徳内の孫。「富国」に関心を持ち、傍ら医学をも学ぶ。維新後、龍角寺村五十嵐氏に招かれて子弟に教え、明治 16 年病没。基の薫陶を受けた石井濱之助が撰文、門人により建碑される。(石井濱之助は 19 歳で中根小学校訓導に就任した俊英)

(2) 吉植庄左衛門と庄之輔の顕彰碑など

明治 17 年 (1884) 銘の「吉植翁碑」は、「吉植荘(庄)左衛門」の顕彰碑。天保 5 年 20 歳で吉植家養子になり、江戸末期の水野忠邦等による手賀印旛沼の開削工事に携わり、明治の以降も治水事業に奔走、明治 14 年没。碑文は孫の庄一郎、建碑は嗣子の吉植庄之輔。

同じく水神社の、**明治 44 年 (1911) 「吉植翁頌徳碑」**は吉植庄左衛門の嗣子吉植庄之輔の顕彰碑。庄之輔は弘化 3 年生、県会議員など要職に就き、印旛沼治水工事の予算獲得に奔走、明治 39 年没。嗣子庄一郎(衆議院議員)が嗣ぐ。碑文の最初には、藩主暴政に抗した木内氏(佐倉惣五郎)を地域の偉人と称え、その事績に水害除去に挺身した庄之輔の功績を重ねている。

なお、北海道の開拓にも尽力した吉植庄一郎の頌徳碑は、宗吾霊堂に建立され、また下井公会堂墓地と下井共同墓地には、昭和 18 年没の吉植庄一郎とその嗣子庄亮の墓塔があり、詳しい業績が記されている。

吉植庄亮(1884~1958)は、歌人であるとともに、原野を拓き農場を経営、吉植新田を完成された。下井吉植家屋敷内には、**吉植庄亮の歌碑**がある。「あしひきの山のきはらのゆふつく日 光となりてちる木の葉あり」、昭和 27 年(1952)「橄欖社門下一同」による建立である。

(3) 義民碑

笠神南陽院境内正面基壇上には、題額に「**三義侠者碑**」と書かれた **1.5m 自然石製の顕彰碑**が台石上に建てられている。明暦 2 年(1656)に刑死した笠神の三義人を顕彰するために、明治 24 年(1891)に建立された重要な義民碑である。

3 人の刑死の原因は、印旛沼辺低地部の開発が盛んになった正保・明暦期の入会地「埜原」の帰属をめぐる小林村との闘争であった。中世は自検断権・自力救済として当然だった村同士の実力闘争も、江戸時代に入って幕府による懲罰が不可避となっていた。その懲罰の犠牲となった村の「義人」に対し、当時は墓塔の建立もはばかられたが、村人は、毎年欠かさず十夜の法要を続けて、明治になって、南陽院住職と三義人の子孫、250 名以上の賛同者によって、立派な顕彰碑が建てられた。

明治 24 年にこの碑が建てられた背景としては、「義民佐倉惣五郎」物語がこの地域の偉人として称賛されたことや、江戸初期に村所属となった入会地が、治水が進み豊かな農地になったことへの感謝も要因であったと思われる。

《参考：白井市の白井市内の主な民間信仰の石造物》

種類	基数	上段：最古 下段：最新
庚申塔	271	所沢鷲神社下庚申塚&谷田庚申塚(寛文 10 年 1670) 折立・熊野神社(昭和 56 年 1981)
出羽三山供養塔	88	根・白井新田天神社(明和 8 年 1771) 平塚・延命寺(昭和 59 年 1984)
馬頭観音塔	91	富塚鳥見神社(宝暦 2 年 1752) 富塚木下墓地(昭和 48 年 1973)
道祖神	31	復・富ヶ谷鳥見神社(享保 15 年 1730) 中台火の見(昭和 29 年 1954)
二十三夜塔	28	中木戸諏訪神社(元禄 11 年 1698) 本郷集会所(大正 7 年 1918)
十九夜塔 如意輪観音像塔	99	平塚延命寺(寛文 10 年 1670) 復・上長殿(明治 35 年 1902)
子安石祠	3	平塚鳥見神社(寛政 12 年 1800) 今井青年館(文政 13 年 1830)
子安像塔	54	中木戸観音堂(文化 6 年 1809) 本郷集会所(平成 11 年 1999)

